

夏  
2003

# みどりのこえ

Green Voice in Summer

## 長野県自然保護研究所ニュースレター

2003年7月24日発行

発行 長野県自然保護研究所

〒381-0075 長野市北郷2054-120 Tel: 026-239-1031 Fax: 026-239-2929  
E-mail nacri@nacri.pref.nagano.jp ● http://www.nacri.pref.nagano.jp/



6月に行なわれた本県中信地区の廃棄物処理施設のSEA(戦略的環境アセスメント)の企画コンペに20社以上のコンサルタント会社が応募したという。1997年公布の環境影響評価法によってようやく日本も新しい開発と保全の枠組みに突入したところではあるが、今回の長野県が行なったSEAの公募はさらに先を行くもので、地域の実質的な生態系保全に寄与することを期待している。さて、環境影響評価法では、環境アセスメントの評価項目に新しく「生態系分野」が加えられた一方、「回避」「低減」「代償」という「ミティゲーション」(法では環境保全措置)の種類と優先順位が示された。その結果、必要な開発事業であれば(即ち、回避も低減もできない場合)、開発に伴う自然の消失に対してそれを人工的に補償する「代償ミティゲーション」が義務付けられることになったのは周知のとおりである。

そのような中、筆者が日本に紹介してきた「HEP」(Habitat Evaluation Procedure、生息地評価手続き)を日本に導入するための検討が盛んになりつつある。実は、HEPは、SEAのような早期の環境アセスメントにおいてこそ、その真価を發揮する。以下にHEPの新しいメカニズムについて簡単にご紹介したい。

環境アセスメントにおける生態系評価の視点は、「要素」「機能」「広がり」の3つに大きく区別できる。「要素」とは、種組成や貴重種の有無などいわゆるフロラやファウナのインベントリー作りや植生区分などもこれに含まれる。「機能」とは、生態系の有する多様な環境保全機能である。例えば、落葉広葉樹林の水源涵養機能、ヨシ群落の水質浄化機能などの生態系維持機能だけではなく、「緑」が人に与える心理的效果など様々である。「広がり」は「時間」と「空間」の広がりの意味である。「要素」や「機能」がどちらかといえば環境の「質」を表すものである一方、「広がり」は環境の「量」を表すものである。

図にHEPの基本的な概念を示した。この図は、開発に伴う環境アセスメントにおいて、開発により消失する開発サイトのハビタットの失う価値と、

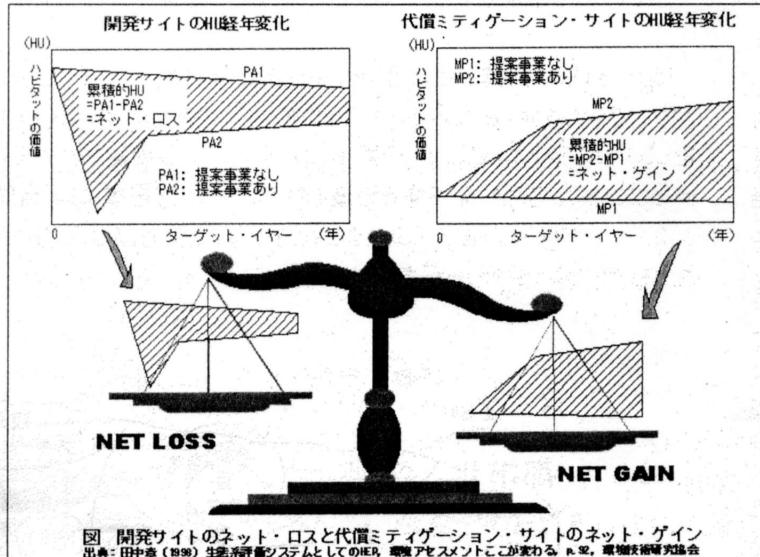


図 開発サイトのネット・ロスと代償ミティゲーション・サイトのネット・ゲイン  
出典:田中泰(1998) 生息地評価システムとしてのHEP、環境アセスメントこれが変わる。K.K.、環境技術研究協会

## ハビタットの定量的評価手続きHEP —持続的な地域生態系形成を誘導するメカニズム—

文 田 中 章

事業の許認可条件として義務付けられた代償ミティゲーションがある場合(MP2)と同代償ミティゲーションがない場合(MP1)のHUの経年変化を示している。ここで、開発サイトのPA1からPA2を引いた斜線で示した部分は開発事業によって失われるハビタットの価値の量であり、これを「Net loss」と呼んでいる。一方、代償ミティゲーション・サイトのMP2からMP1を引いた斜線で示した部分は代償ミティゲーションによって得られるハビタットの量であり、これを「Net gain」と呼んでいる。いわゆる米国などで実践されている湿地などの量を現状維持するという「ノーネットロス」政策の「no net loss」は、この両者が釣り合う状態を指す。

このように、HEPは、開発によって失われるハビタットの価値と代償ミティゲーションによって得られるハビタットの価値を「質」「時間」及び「空間」の観点から数量化することで、地域におけるハビタットの損得の比較考慮を可能にし、開発と保全のあり方を議論する際に、生態学的でかつ誰にでもわかりやすい議論の叩き台を提供する。

今後のSEAでは、このHEPのように開発によって、地域の自然環境において何を失い何が補償されるのか、それがわかりやすく示されることが重要である。そうすれば、市民は自ずと環境アセスメントの議論に参加してゆくだろう。長野県の健闘を期待したい。

(武藏工業大学環境情報学部助教授・環境アセスメント学会生態系部会長)